

しが、終に頭を捉てさかしまになし、ふり廻しければ、頭の水こぼれて、淵猿忽ち力おとろへければ、捉てきしにあがり、化生取たりとよば、りければ、見物の貴賤取たりと、一同におめき、暫く鳴もまづまらず、かくて元重件のものをなわにてまばりて、捉て城中へ歸り、釜が淵の化生、生どり候と訴けり、元就感悦し給ひて、誠に源三郎は天地鬼神にも増りたりとて、加恩五十貫、來國行の太刀を玉はりければ、源三郎うけずして、かゝる畜類をとり候へばとて、御恩賞に預り候事、却て迷惑仕候なりとて、打笑ひつゝ、太刀かたな御前に差置、我屋にさして歸りける。

老嫗
茶話

〔信濃奇談上〕河童

羽場村に天正の比、柴河内といふ人住ぬ、ある時馬を野飼にして、天龍川の邊にはなち置けるを、河童といふもの、此馬取んと手綱とらへて牽けるに、さながら自由にもならず、かなたこなたへ行を、かの河童繩をとらへかねてや、おのが腰に巻て川へ引入んとするに、馬はひかれじとあらそひいどみけるが、河童かくてはかなはじとや思ひけん、かの手繩をだん／＼におのが身にまとひつけて、力のあらんかぎりあらそひ引て、今少し此水の中へ引入たらんには、いかに大きな馬なりとも、とらでやは置べきといどむうち、時うつり日くれたり、寔や小は大にかなひがたく、終に馬は走り出して、おのが家へはしり來る、河童は繩をいく重も身にまとひたれば、とぐいとまなくひかれ來るさま、人々はしり出て、あなめづらし希有の事哉と、集ひよりてきびしくまばりつなぎて、厩の柱にくゝりつけ置ぬ、あるじ仁心ある人にて、無益に殺すもさすがにあはれみて、繩解てはなちけり、その後その恩を報せんにや、川魚など取て、戸口におきし事度々ありしと、小平物語に見へたり、今も猶里老は語り傳ふ、近き比にも、河童の小兒など取ける事多くあり、河童とかきてかつはとよぶは、かはわつはの略なり、本草溪鬼蟲の附録に水虎といへるは、此たぐひにやと、貝原翁いへり、私にいふ、是水獺の老たるものにや、貝原翁又いふ、淮南子に、魍魎狀